

冬構え

高齢者文学人生論

山田太一 (1934-)

『冬構え』(1985) 「NHK」

演出：深町幸男

出演：笠智衆 (1904-1993)

藤原釜足 小沢栄太郎 沢村貞子
金田賢一 岸本加代子

0

孫がの、人間、生きとるのが一番だといえ
という。わしには、そしたことはいえね。

老け役がよく似合う俳優といえば、誰よりもま
ず笠智衆の容貌がうかんでくる。昭和二十八年に
はまだ四十九歳だったが、小津安二郎監督の映画
『東京物語』では妻に先立たれた七十二歳の孤独
な老人をそれらしく演じた。

それから四十年以上、彼はもっぱら老人を演じ
続けた。『男はつらいよ』シリーズでは柴又帝釈
天題経寺の住職（御前様）を演じており、第四十
五作「寅次郎の青春」公開三ヶ月後の平成四年三
月に永眠した。八十八歳。

その八年前の昭和六十年にはNHKのテレビド
ラマ『冬構え』で死に場所をもとめてみちのく一
人旅に出かける老人を演じている。『東京物語』
と同じように、妻に先立たれた一人暮らしの老人
だ。子供が三人、孫が七人いて、亡妻の墓参りの
あと、みんなして、なごやかに夕飯を食べ、おじ
いちゃんバイバイと機嫌よく帰っていった。

まあ、幸せな老後のほうだ。なんとか、金銭的
にも、子供たちの世話にならずに生きている。し
かし、少しボケが出て、身体もめっきり弱くなっ
た。いずれ、子供たちの厄介にならざるをえない
が、そうになると、老人介護の問題に直面する。

離れて暮らしていると、子供たちも嫁も、いい
顔をしているが、どの家も老人が行って寝込んだ
ら、ニコニコ笑ってばかりではいられない。子供



冬構え

—— 高齢者文学人生論

たちが夫婦喧嘩をして、たらい回しということになるかもしれない。

老人は足腰のたつうちに、死のうと思った。この折をのがせば、間もなく、更におとろえ、みずから死を決する力を失ってしまうだろう。贅沢かもしれないが、いいじいさんのままで、この世を去りたい。

立つ鳥跡を濁さず——その気持は私にもよくわかる。老人はみちのく一人旅に出かけた。鳴子、平泉、盛岡、宮古、田老、八戸、そして恐山の断崖から思いきって身を投げたが、死にきれず、断崖を這い上がった。その気持もよくわかる。

その後、老人は旅先で知り合った若者（金田賢一）に案内され、貧しい農家を訪れる。そこでは若者の祖父（藤原釜足）が一人で暮らしていた。

「孫がな」と、その無口な男は言った。

「はい」

「あんたさに、いえという」

「はい（なにをですか？）」

「人間、生きとるのが一番だといえという」

「（目を伏せ）そうですか」

「そしたことはいえねえ」

「・・・」

「わたしには、生きとるのが一番なのって、そしたことはいえね（淡々という）」

古寺の簀子も青し冬構へ 凡兆